

要 旨

小学校外国語活動において、コミュニケーションの意欲を高めるために、英語ノートの言語材料や活動を基に、聞いたり伝えたりする必然性のある活動を充実させた単元構成及び活動の工夫を行った。英語ノートの活動にインフォメーションギャップのある題材提示やタスク活動を取り入れたり、授業の形態を工夫したりした。さらに、それらの活動を配列して単元の再構成を行った。授業実践を通して、児童は、「聞きたい」「伝えたい」というコミュニケーションへの意欲が高まり、活動そのものだけでなく、指導者や友達とのかかわりをも楽しめるようになってきた。

〈キーワード〉 ①コミュニケーションへの意欲 ②「聞く」「伝える」必然性 ③英語ノート

1 研究の目標

コミュニケーションへの意欲を高めるために、英語ノートの言語材料や活動を基に、聞いたり伝えたりする必然性のある活動を充実させた単元構成及び活動の工夫を探る。

2 目標設定の趣旨

現代は、社会や経済の国際化が進み、異なる文化や言語をもった人々とかかわりながら生きていくことは避けて通れないこととなってきた。これからの社会を生きていくために、自他の文化を理解しながら、他者を受け入れたり、自己表現をしたりするコミュニケーション能力は、必要不可欠である。一方で、社会や生活の変化に伴って、他者と直接的にかかわる機会が失われつつある。児童の中には、相手の意図が酌み取れずに誤解が生じたり、自分の気持ちをうまく伝えられずにパニックになったりするなどの事象が増えてきている。このことは、人との関係の中でうまく判断する力が十分に育っていないことの表れの一つであろう。

そうしたことから、平成20年3月に告示された学習指導要領において、外国語活動の目標に「コミュニケーション能力の素地を養う」ことが挙げられた。外国語活動を通して、外国語を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、他者に対して自分の思いを伝えることの難しさや大切さを実感したりしながら、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲を高めていくことが求められている。

さらに、教育の機会均等や中学校との円滑な接続の観点から、外国語活動において共通に指導する内容が示され、共通教材として英語ノートが配布された。作成された趣旨やその内容の豊富さを考えれば、指導計画や単元を作っていくときに土台として活用できるものである。これに児童の実態や地域の実情に合わせた工夫を加えながら取り扱うことで、指導効果を高めることができる。

このように、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲を高めることで、コミュニケーション能力及び異言語や異文化に対する寛容さなどが身に付き、将来的に「よりよく判断する力」を高めることにつながっていくのではないかと考えた。

そこで、本研究では、グループの研究テーマ、研究課題を受け、外国語活動において、英語ノートを活用しながら、聞いたり伝えたりする必然性のある活動を充実させた単元構成及び活動の工夫をすることで、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲を高めていくことができると考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

外国語活動において、英語ノートを基にして、聞いたり伝えたりする必然性のある活動をより充実さ

せた単元構成及び活動の工夫をすれば、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲が高まるであろう。

4 研究方法

- (1) 外国語活動の目標及び、活動内容、評価などについての理論研究
- (2) 外国語活動やコミュニケーションに関するアンケート調査を基にした児童の実態調査
- (3) コミュニケーションを図ろうとする意欲を高めるための単元構成及び活動の工夫、授業実践並びにその成果の検証・考察

5 研究内容

- (1) 小学校学習指導要領解説外国語活動編や英語ノート指導資料、先行研究、その他の文献等により聞いたり伝えたりする必然性のある活動を取り入れた単元構成や活動の在り方を研究する。
- (2) 事前に質問紙による意識調査を実施し、その結果を分析し、単元構成及び活動の工夫を行うときの基礎資料とする。授業後の振り返りカード(児童による自己評価)や質問紙により態度や意識の変容を見る。
- (3) 英語ノートを基にした単元構成及び活動の工夫を行い、所属校第6学年「行ってみたい国を紹介しよう」、「自分の1日を紹介しよう」において、3時間ずつの授業実践を行い、仮説を検証し、コミュニケーションを図ろうとする意欲を高めるために取った手立ての有効性を示す。

6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

ア コミュニケーションについて

小学校外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」¹⁾と述べられている。このうちの最後の部分が基本的かつ最終的な目標であるにとらえることができる。

この場合のコミュニケーションについて、宗は、「単に、情報をやり取りするだけでなく、感情や気持ちを『分かち合う』こと」²⁾と述べている。また、受信と発信、非言語メッセージの活用もコミュニケーションの重要な要素としてとらえ、小学校外国語活動においてコミュニケーション活動を仕組む場合、話を聞きたくなるような題材を用意する、伝えたいと思うような場面設定をするなど、感情を揺り動かすための工夫をする必要があるとも述べている。

一方、松川は、活動の種類とともに形態を意識する必要性を述べている。個人で行うのかグループで行うのかなどの形態は、児童の心理的な負担を考慮しながら計画するべきであるとしている。

イ 英語ノートについて

松川によると、英語ノートは外国語活動を展開していくための参考図書として非常に有益であり、英語ノートを使うことで、全国で共通した外国語活動が実施でき、教師の負担軽減になるとしている。ただし、「英語ノートを教える」のではなく、「英語ノートで活動する」ことを念頭に置かなければならないとして、教材研究の重要性を述べている。

さらに、金森は、英語ノートについて、「入門期に十分にかかるべき聞く活動の時間が少ない」「話すことを急いでいる」「児童同士のかかわりが十分ではない」などの問題を指摘している。

よって、英語ノートを基に、聞いたり伝えたりする必然性のある活動を取り入れ、単元構成を工夫すれば、コミュニケーションへの意欲を高めるためのより有効な教材となるであろう。

ウ 研究の全体構想

これらの考えを受け、本研究では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲を高めるために、英語ノートに基づいて、コミュニケーションを図りたいと思うような題材を用意したり、活動の形態をいろいろに設定して多様なコミュニケーションを体験したりするなど活動の工夫と、それらの工夫を取り入れた単元構成を研究することとした(図1)。

(2) 児童の実態把握

検証授業①の前に行った「外国語活動に関するアンケート」において、ほとんどの児童が外国語活動を「楽しい」と感じており、「活動に進んで参加できている」と自己評価している児童も8割以上いた。特に、「ゲームやクイズが楽しい」と答えた児童が多かった。しかし、少数ながら、「ALTの言っていることが分からないので不安」と思っている児童もいた。

(3) 授業の実際と考察

ア 意欲の高まりの検証について

「コミュニケーションへの意欲」を検証の視点に、資料1に示す手立てを取り入れて、表1、次頁表2のように英語ノートの活動を見直し、単元の再構成を行い、所属校第6学年を対象に2つの単元で授業を行った。

検証する方法として、事前事後のアンケート調査、児童の振り返りカードの記述及び授業中の行動や発言の観察(授業時・ビデオ映像)から学級全体と抽出児の変容を見取ることとした。

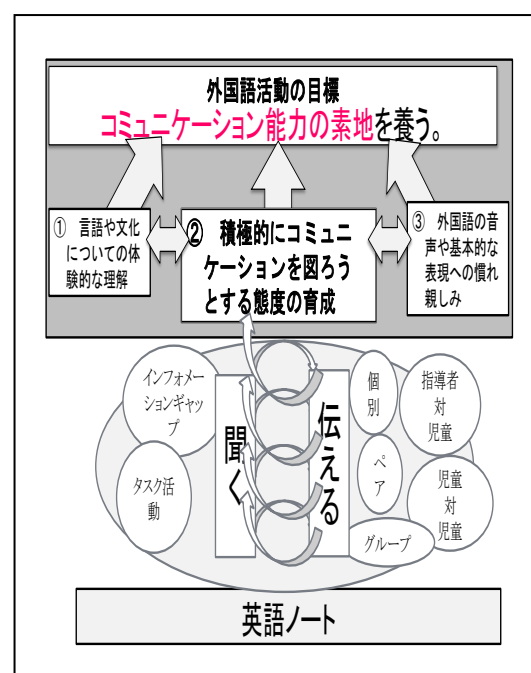


図1 研究の全体構想

聞いたり伝えたりする必然性のある題材の提示や場面の設定をすること

- ① 知的好奇心を刺激するようなインフォメーションギャップのある題材を提示する。
- ② 聞いて作業をしていたら、何か形のある物が完成する(成果が見える)ようなタスク活動を取り入れる。

活動の形態を変え、コミュニケーションの多様化を図ること

- ③ 個別での活動(指導者対児童のコミュニケーション・児童対児童のコミュニケーション)
- ④ ペアでの活動(指導者対児童のコミュニケーション・児童対児童のコミュニケーション)
- ⑤ グループでの活動(指導者対児童のコミュニケーション・児童対児童のコミュニケーション)

資料1 検証の手立て

表1 活動及び単元構成の工夫(検証授業①)

検証授業① (英語ノート Lesson6「行ってみたい国を紹介しよう」)			
英語ノート活動計画案(全4時間) (下線は見直した活動)	活動の工夫 (検証の手立て)	変更後の活動計画(全3時間) (下線は検証の視点を入れた活動)	形態
1時目 1 P36の4人の子どもたちの出身を予想してCDで聞き取れたことを記入し、気付いたことを発表する。 <u>様々な英語があることに気付く。</u>	・ 対話形式で聞かせて、内容をとらえやすくする。	1時目 1 英語ノートの子どもの自己紹介やALTの自己紹介を指導者同士の対話形式で聞いて、分かったことをメモする。	個別

3 P 48 の絵と時刻を線で結んで、自分の生活表を作る。	性に気付かせる。(①) ・自分の生活を紹介するためのカードをALTにもらうことで、伝える必然性を高める。(②)	3 自分の生活表を作るためにALTから動作カードをもらう。	グループ
4 時目 1 ジェスチャーをしながらチャンツを言う。 2 指導者の一日の生活を紹介し合う様子を見ながら紹介の仕方を知る。 3 グループで紹介し合い、分かったことをP 49 に書き込む。 4 グループの活動で分かったことを紹介し合う。	・ALTの説明を聞きながら、生活表を完成させる。(②)	4 時目 1 動作カードを見て、ジェスチャーをしながらチャンツを行う。 2 動作カードをはり、自分の生活表を作る。自分のオリジナルカードを1枚作る。 3 1日の生活をグループで紹介し合う。	個別 個別 グループ

ウ 児童の様相と考察

(7) 検証授業①(2/3)

「聞いたり伝えたりする必然性のある題材の提示をした活動」として、インフォメーションギャップのある題材提示を行った。電子黒板の映像を見ながら、いろいろな国の有名なものやその言い方を知る活動であった。画面提示が単調にならないことと、指導者が題材についてやり取りをすることに留意して進めていった。

B児(資料2)は、ずっと電子黒板の画面に集中していた。“What animal …?”と“What country …?”を聞き分けて、それぞれ「パンダ」「中国」と答えていた。また、「2枚の写真のちがうところはどこだろう。」の発問に他の児童が答えたことに対してうなずいていた。

他の児童についても、“Do you want to go to ○○?”という発問に対して“Yes.”や“No.”で応じたり、“What animal …?”の発問に対して他の児童が「白ご飯」と返したことに「アニマルじゃないやん」と言ったりする場面があった。

このように、適切に反応できているのは、題材に集中したことによる「聞きたい」「答えたい」というコミュニケーションへの意欲が高かったととらえることができる。

(イ) 検証授業②(1/3)

「聞いたり伝えたりする必然性のある題材の提示や場面の設定した活動」として、タスク活動を取り入れた。ALTの説明を聞きながら時差時計を作り、各地の時刻を調べることをタスクとした。

C児(資料2)は、発話はほとんどなかったが、ALTの説明に従って、はさみを出したり、穴を空けたりする作業を行っていた。これまで周りを見ながら作業を進めることが多かったが、聞きながら自分で作業を進めていた。振り返りカードの「ALTの先生の指示で作業ができましたか？」に「とてもがんばった」の自己評価をしていた。

他の児童は、ALTが作り方を英語で説明しているとき、“paper”, “circle”, “scissors”など聞いたことのある単語が聞こえると、その単語を拾って発話していた。指導者の発話をよく聞いていたことの表れであろう。

B児

自分の気持ちを比較的素直に表出することができる。意欲的なときとそうでないときの態度がはっきりしている。「活動に進んで参加しているか」には、「どちらかというとはい」と自己評価していた。

C児

普段から発表することを苦手と感じているC児は、外国語活動は難しいと思っている。また、「(英語が)分からないので不安」とも感じている。「活動に進んで参加しているか」には、「いいえ」と自己評価していた。

資料2 抽出児のプロフィール

(ウ) 検証授業①(3/3)

「コミュニケーションの多様化を図るため活動の形態を変える」として、自分が行ってみたい国をクイズにしてグループ内で紹介し合う活動を設定した。

C児は、授業の前半の一斉の活動では、硬い表情で、全体的な問い掛けに対してほとんど口を動かしていなかった。ただし、「ALTの先生の後について一緒に言ってみましょう」や「〇〇しなさい」という行動の指示に対しては適切な反応ができていた。グループになると、笑顔になり、リラックスしている様子がうかがえた。前時のいろいろな国の有名なものを知る活動の後、本時までの間に、行ってみたい国について家庭で調べてきていた。グループでの発表の前の準備の活動では、ALTに自分から声を掛けて、分からない英語表現について質問をしていた。グループで最初に行きたい国を紹介する順番になったが、躊躇なくヒントを出すことができた。クイズ形式で発表をし、同じグループの児童に答えを当ててもらったときには大きくうなずいていた。自分の行ってみたい国を友達に伝えたいという意欲の表れととらえることができる。

エ 検証授業全体を通しての変容と考察

事前のアンケートや普段の学習、生活の様子を踏まえて、表3のように、学級の児童を「よく発言をする」A群、「全体での発言がほとんどない」C群、それ以外中間層のB群にあらかじめ分けておき、それら各群の中から抽出児を選んでおいた。

学級全体において、アンケートの結果を見ると、検証授業①、②の前後で、表3に示すように「活動に進んで参加している」という自己評価が高まっている。ただし、検証授業①におけるC群の児童の評価は下がっている。これは、検証授業①では、全体で一斉に見たり聞いたりする活動が多く、動き回ったり物を作ったりするような体を動かしての活動が少なかったためと思われる。また、「楽しい」と感じたり、「できている」という自信がもてたりする活動の数が増えている(図2、3)。これは、活動の工夫により、ALTと児童、あるいは児童相互のやり取りの機会が増え、他者とかわかれたという達成感が得られたためと思われる。

表3 活動に進んで参加できているかの質問に対しての自己評価の変化

(はい…4, どちらかというとはい…3, どちらかというといえ…2, いいえ…1)

	普段からよく発言する児童群 (A群)の平均値 (8人)	中間の児童群(B群)の平均値 (14人)	普段、全体での発言がほとんど見られない児童群(C群)の平均値 (6人)
検証授業①	事前 3.6→事後 3.8	事前 3.1→事後 3.3	事前 2.3→事後 2.0
検証授業②	事前 3.1→事後 3.3	事前 3.2→事後 3.3	事前 1.8→事後 2.0

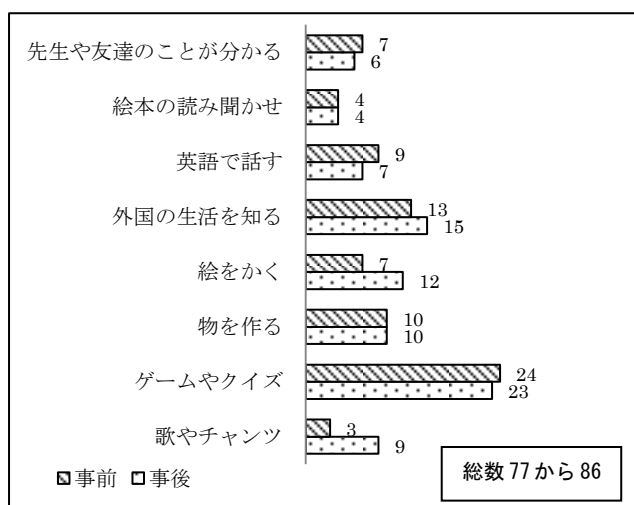


図2 外国語活動で「楽しい」と思う活動

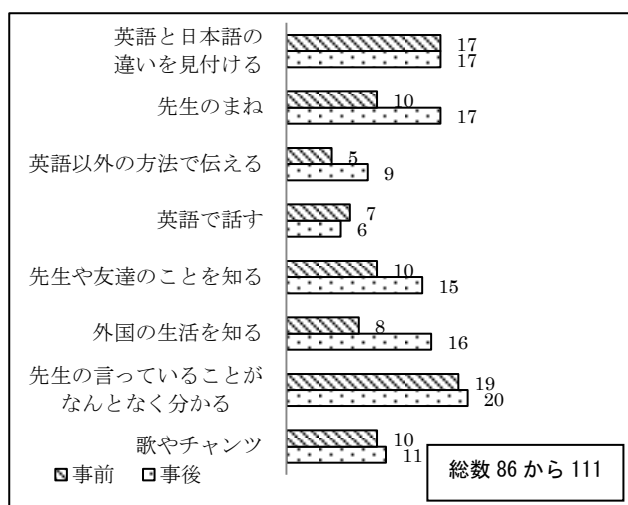


図3 外国語活動で「できている」と思う活動

B児は、検証授業①においては活動そのもののおもしろさについての記述が多かったが、3／3時のグループでの活動の後では友達と一緒に活動したことについての感想を書いていた。検証授業②では、「聞く」ことについての感想が多く見られた。他者とかかわることへの関心が高まったと言えるだろう(資料3)。

B児の振り返りカードの記述(原文のまま)

(検証授業①)

- ・今日は外国の国旗を見て、その国旗を当てる勉強をしました。いろいろな国旗が分かりました。とても楽しかったです。
- ・今日は国の建物や動物、スポーツなどを教えてもらいました。ぼくは、いろんな国々に行って好きなことや楽しいことをしたいです。
- ・今日は最後の国を紹介しようだったけど、とても楽しくできました。グループでやったときはおもしろかったです。

(検証授業②)

- ・今日は外国の時間を調べました。外国の時間はちがうことが分かりました。ビンゴゲームもしました。久しぶりの英語はとても楽しかったです。
- ・今日はサイモンセズゲームと(A L Tの)先生の1日を調べました。サイモンセズゲームは説明を聞いてやり方が分かったら楽しかったです。(A L Tの)先生はとても1日が早いことを知りました。
- ・ほかの人の1日が分かりました。1日を表す表現は少し忘れていました。また、今度の英語でも楽しく過ごしたいです。
- ・みんな1人1人のちがうところがあり、友達の1日を知れてよかった。それに、今日で1日を紹介しようが最後だったので一生けんめいとirkんだ。

(注) 下線.....は他者とかかわったことについての感想

資料3 B児の振り返りカードの記述

C児は、全体では、大きな声を出さないといけないことや、間違えたら恥ずかしいという思いからなかなか積極的になれないが、グループなどの少人数になると、分からないときには側にいる友達にすぐ聞くことができたり友達が助けてくれたりするので、不安感が軽減していると考えられる。検証授業①の振り返りカードには、聞いたり話したりすることについての記述があった。検証授業②になると、それがなくなり、聞き取った内容についての感想が多くなっている(資料4)。他者とかかわりに対する抵抗感が軽減したとも考える。しかし、最終のアンケートには、難しくて、発表が多いので、外国語活動は「どちらかというと好きではない」「どちらかというと活動に積極的に参加していない」と答えていた。外国語活動全体を通して、多人数の前で発表しなければならないという心理的な負担が「外国語活動は難しい」という思いにつながっているのではないかと考える。

C児の振り返りカードの記述(原文のまま)

(検証授業①)

- ・外国の国旗を見るのはおもしろかったけど、最初のインタビューはがんばって聞きました。また、外国の勉強をしたいです。
- ・外国のお城は美しくて好みの感じでした。でも、他の国の世界遺産とかも、スバラシかったので行ってみたいと思いました。
- ・絵をかくのはむずかしかったし、ヒントを出すのはきんちょうしましたが、とてもおもしろかったです。世界のことを知るのはおもしろかったです。

(検証授業②)

- ・外国と日本の時差をたくさん見つけました。とてもすごかったです。また、国によって色々ちがうのでおもしろいとおもいました。あと、ビンゴゲームもおもしろかったです。
- ・A L Tの先生の1日はおもしろくてすごかったです。また、やりたいと思いました。
- ・いろんな生き物の1日が分かりました。すごくおもしろかったけど、みんなちがっていてすごかったです。
- ・班の人のことが分かってとてもおもしろかったです。また、意外なことも分かってすごかったです。

(注) 下線.....は、聞いたり話したりすることについての感想 下線.....は、内容についての感想

資料4 C児の振り返りカードの記述

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

コミュニケーションへの意欲を高めるために次のような活動の工夫やそれらを組み合わせた単元構成の工夫は有効であることが明らかになった。

ア 聞いたり伝えたりする必然性のある題材の提示や場面の設定をすること

インフォメーションギャップのある題材提示を行うことで、題材に対する興味を高め、児童の「聞きたい」「伝えたい」という意欲を高めることができた。その際、意図的に題材についてのやり取りをすることも意欲を持続させるために必要であると考えられる。

また、物を作るようなタスク活動は、「自分も作りたい」という活動への意欲や、そのためには「聞かなければならない」という必然性をもたせるのに有効であった。聞いて作業すれば物ができた、できた物を使って調べられたという経験は、達成感や満足感を充足させ、次もまた聞いてみようという意欲の高まりにつながっていくと考えることができる。

イ 活動の形態を変え、コミュニケーションの多様化を図ること

普段から指導者の発問に対して自分の考えを発言することが多い児童は、どのような形態の活動でも活発に活動できる。一方、普段全体の場での発言がほとんど見られない児童については、グループ活動においては、全体での活動に比べて積極的な様子が見られた。このことから、活動形態の工夫を行うことで、どの児童にも「活動をした」という場面を作ることができた。

ウ 単元構成の工夫

単元構成の原則として、聞く活動から伝える活動につなげていき、最終的には双方向のやり取りもねらうこととした。一つ一つの活動が「聞く」「伝える」「双方向のやり取り」のどれをねらっているか意識しながら、活動をスパイラル的に配列した。このとき、「伝える」を「話す」と狭義にとらえず、うなずいたり適切に行動したりする「反応すること」ととらえたことで、児童は、「習った英語を使わなければならない」という心理的な負担が軽減され、コミュニケーション活動を楽しむことができた。

(2) 今後の課題

ア 本研究で取り扱った以外の聞いたり伝えたりする必然性のある活動の工夫

イ 検証授業で行った単元以外の英語ノートにおける単元での活動や単元構成の工夫

ウ コミュニケーションへの意欲を高めるための目標設定や評価の在り方

《引用文献》

- 1) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』 平成 20 年 8 月 p. 7
- 2) 宗 誠 『小学校ならではの英語活動』 2007 年 5 月 文溪堂 p. 30

《参考文献》

- ・ 金森 強 『小学校英語教育の進め方―「ことばの教育」として―』
2009 年 10 月 成美堂
- ・ 松川 禮子 『小学校外国語活動実践マニュアル』 2008 年 9 月 旺文社
- ・ 佐賀県教育センター 『国際コミュニケーションの素地をつくる英語活動』 平成 20 年 3 月